

## 北海道合鴨水稲会

# 水かき通信

### 【本号の内容】

1. 北海道合鴨水稲会総会・研修会 開催さる！（事務局）
2. 第19回全国合鴨フォーラム秋田大会に参加して（清水池会員）
3. 会員アンケートの結果について（事務局）
4. 名寄徒然草（5） 名寄の自然と四季（三島名誉顧問）

### 第15回北海道合鴨水稲会総会・研修会参加報告

小坂橋正裕（事務局）

2009年2月21日、名寄市立大学にて第15回総会並びに研修会が開催されました。普段なかなか足を運ぶことの無い名寄の地にて開催された総会・研修会ですが、興味深い講演会と活発な議論、そして楽しい夜という濃い内容でありました。その内容を報告致します。

当日朝の札幌は大荒れの天候で、我々事務局員は名寄到着が大幅に遅れてしまいました。また私たちの他にも何名か到着が遅れるという方がいらっしやっただけ、名寄市立大学では研修会のみ開催し、総会は懇親会会場にて行うこととなりました。

今回の研修会は「地域を元気にするスモールビジネス——道北地域の取り組み」というテーマの下開催され、三島徳三先生（本会名誉顧問・名寄市立大学副学長）による「ひまわりと亜麻による地域おこし」と、今井宏さん（エミュー生産者、下川町）による「エミューにかける夢」の2本の講演が行われました。

三島先生は名寄市立大学道北地域研究所の所長であり、今回の講演はその活動の報告でもありました。先生は大学の学生とともにひまわりや亜麻を育て、これらからひまわり油・亜麻仁油、そして亜麻繊維を製品化することにより地

域おこしができないか、と試行錯誤されているとのことです。特に亜麻に関しては、実際に亜麻の生産を行っている会員もいることから、活発な質疑が行われました。

今井さんは下川町にてエミューを生産されています。エミューといえば暑く乾燥した地域に生息する動物ですが、それを今井さんは北海道で生産しているのです。「エミューは寒さに順応する」という興味深いお話を伺いました。合鴨を生産する参加者からはエミュー肉の販路や生産状況、生産規模、そしてエミュー肉の味についてなど、合鴨と比較しつつ多くの意見が飛び交いました。

研修会が終わると一同名寄市立大学を後にし、懇親会の会場である日向温泉へ移動です。風呂に浸かった後、冷たいビールに手を伸ばしたくなるのをぐっとこらえ、まずは総会の開催です。

総会では、はじめに2008年度事業報告並びに決算報告があり、全会一致により承認されました。また2009年度事業計画並びに予算の提案についても、全会一致により承認されました。尚、事務局からは全国合鴨水稲会へ団体加盟した旨も報告されました。これは年会費として北海道合鴨水稲会から支払うものの、会誌「合鴨通信」の購読や全国フォーラムの情報が得られ

る、という説明がありました。

こうして各種事項について承認を終え総会を閉じ、場を宴会場へと移します。非常に楽しい懇親会となりましたが、その模様に関しては紙幅の都合上割愛させていただきます。皆さんお



名寄市立大学での研修会の様子

酒に強いようで、お酒の弱い私は終盤ともなると半分寝ながらお話を伺っておりました。

生憎の天候に見舞われながらも名寄に御集合下さった会員の皆様、本当にお疲れ様でした。次回は圃場見学会の折にお会い致しましょう



懇親会の後に記念撮影

## 2008年度北海道合鴨水稲会 事業報告

### 1. 第14回総会の開催

日時：2008年2月16日（土）

場所：NTT北海道セミナーセンター（札幌市中央区）

担当：道南ブロック

研修会：「農業現場における環境問題への取り組み～環境会計と農業ISO14001の事例分析～」

講師：家串哲生 先生（酪農学園大学 講師）

参加：15名（研修会）

### 2. 圃場見学会の実施

日時：2008年7月12日

担当：道北ブロック

見学先：浅野圃場（旭川）、仲山圃場（愛別）等

参加者：18名（会員10、事務局6、会員家族2）

### 3. 世話人会の開催

#### 1) 2008年度第1回

日時：2008年1月12日

場所：北海道大学農学部 3階  
農業経済学科会議室

参加：大塚、折坂、桑田、吉野、清水池、庄子  
議題：総会に向けて

#### 2) 2008年度第2回

日時：2008年3月20日

場所：北海道大学農学部 3階  
農業経済学科会議室

参加：大塚、折坂、佐竹、諸戸、吉野、大窪、清水池、庄子

議題：新代表世話人の選出、2008年度の活動計画について

### 4. 会報「水かき通信」の発行

#### 1) 第26号の発行

発行日：2008年5月6日

内容：新代表世話人あいさつ、総会の報告、名寄徒然草

#### 2) 第27号の発行

発行日：2008年8月9日

内容：圃場見学会報告、アイマトン25周年記念パーティー出席報告、北海道合鴨水稲会公式HP開設のお知らせ

※事業計画では第28号を秋ごろに発行する予定であったが、記事になる話題が少なかったなどの理由から見送られた。

### 5. 合鴨水稲同時作の実施状況に関するアンケートについて

2008年中に実施する予定だったアンケートは、作業の都合により2009年2月に実施すること

とした。

6. 北海道合鴨水稲会公式 HP の開設

開設日：2008年8月1日

URL : <http://hokkaidoriceduckfarming.web.fc2.com/>

7. その他の重要な事項

1) 株式会社アイマトン 岩井社長からの寄付金について

2008年5月14日に、株式会社アイマトン社長の岩井政海氏より寄付金5万円の贈呈を受けた。これは岩井氏が経営する株式会社アイマト

ン(滝川市)の創業25周年祝賀事業の一環として行われたもので、当日は滝川市内で開催されたパーティーに折坂代表世話人と清水池事務局員が出席し、寄付金を受け取った。この時の模様は会報「水かき通信」第27号(2008年8月9日発行)に報告がある。

2) 全国合鴨水稲会へ団体加盟

本会は、全国合鴨水稲会へ団体加盟した。年会費として1万円が必要となるものの、会誌「合鴨通信」が購読できるほか、全国フォーラムの情報などが得られるためである。

北海道合鴨水稲会 決算報告書  
自2008年1月1日 至2008年12月31日

1. 一般会計		単位：円		
	予算	実績	備考	
収入の部	当年度会費収入	114,000	64,000	→予：38人×3,000円
	過年度会費収入		3,000	実：21人×3,000円+1,000円(過払い)
	学生会費収入	4,000	4,000	→4人×1,000円
	雑収入		42,056	→総会・圃場見学会の残金
	実収入計：①	118,000	113,056	
	前年度繰越：②	105,976	105,976	
	収入の部合計：③=①+②	223,976	219,032	
支出の部	世話人会交通費	34,000	27,610	→2回開催、出席は4人+4人。
	役員会費	10,000	10,000	
	事務局手当	20,000	20,000	
	(手当関連 小計)	(64,000)	(57,610)	
	「水かき通信」発送費	9,000	4,960	予：3回分 → 実：2回分
	「水かき通信」印刷費	5,000	5,000	コピーカード
	圃場見学会案内発送費	3,000	2,320	80円×29通
	その他文書通信費	4,000	2,360	世話人会案内Fax送料、総会案内送料
	その他文書印刷費	5,000	0	
	(文書関連 小計)	(26,000)	(14,640)	
	アンケート印刷費	3,500	0	
	アンケート発送費	3,000	0	2009年2月に実施予定のため、2008年中は支出なし
	アンケート返信費	3,200	0	
	(アンケート関連 小計)	(9,700)	(0)	
	総会・圃場見学会補助費	30,000	30,000	総会・圃場見学会に1万5000円ずつ支出
	会費払い込み手数料	2,100	0	予：30人×70円 → 実：振込者負担
	総会運営費	15,000	15,000	総会講師料+講師飲食費
雑費	5,000	12,876	全国合鴨水稲会の会費(1万円)、文具代	
実支出計：④	151,800	130,126		
	予備費：⑤	72,176	0	
	支出の部合計：⑥=④+⑤	223,976	130,126	
	次年度繰越：③-⑥	0	88,906	
2. 寄付金会計		単位：円		
	予算	実績	備考	
収入	前年度からの繰越	100,000	100,000	三島教授退官記念(2006年2月)
	寄付金収入		50,000	アイマトン創業25周年記念(2008年5月)
	収入の部 計		150,000	
支出	次年度へ繰越		150,000	
	支出の部 計		150,000	

## 2009年度北海道合鴨水稲会 事業計画

1. 第15回総会の開催  
日 時：2009年2月21日（土）  
場 所：名寄市立大学（名寄市）  
研修会：「地域を元気にするスモールビジネス—  
道北地域の取り組み」  
講師：三島 徳三 氏（名寄市立大学副学長・道  
北地域研究所所長）  
今井 宏 氏（エミュー生産者、下川町）
2. 圃場見学会の開催  
予定日：2009年6月ころ  
担 当：道央ブロック
3. 世話人会の開催  
2009年度第1回  
日 時：2009年1月12日  
場 所：北海道大学農学部3階 農業経済学会  
会議室  
内 容：総会に向けて
4. 会報「水かき通信」の発行  
1) 第28号の発行  
予定日：2009年4月ころ  
内 容：総会・研修会の報告、全国合鴨フォー  
ラム参加記録、アンケート結果など  
2) 第29号の発行  
予定日：2009年7月ころ  
内 容：圃場見学会の報告
5. 合鴨水稲同時作の実施状況に関するアンケ  
ート調査の実施  
会員の合鴨水稲同時作の実践状況を把握するた  
め、アンケート調査を実施する  
→2009年2月にアンケート票を発送済み
6. 全国合鴨フォーラム参加者への補助  
全国合鴨フォーラムへの出席者に対して、参加  
費を助成する。
7. 公式ホームページの定期的な更新 随時

## 2009年度 北海道合鴨水稲会 役員構成

- 代表世話人：折坂義一  
世 話 人：佐竹良州・桑田実（道北）  
折坂義一・吉野徹（道央）  
大塚利明・諸戸浩美（道南）  
監 査：大窪宗磨
- 顧 問：飯澤理一郎（北海道大学大学院農学研究院 教授）  
名誉顧問：三島徳三（名寄市立大学 教授）  
事務局長：大原睦生（北海道立畜産試験場）  
事務局員：小坂橋正裕、佐々木稔基、庄子太郎、村田均（北海道大学大学院農学院）  
山内一久（酪農学園大学酪農学研究科）

北海道合鴨水稲会 予算計画書  
自2009年1月1日 至2009年12月31日

単位：円

	2008年実績	2009年予算	備考	
収入の部	当年度会費収入	64,000	36人×3,000円	
	過年度会費収入	3,000		
	学生会費収入	4,000	4人×1,000円	
	雑収入	42,056		
	(実収入 小計)	(113,056)	(112,000)	
	前年度繰越	105,976	88,906	
<b>収入の部合計</b>				
	219,032	200,906		
支出の部	世話人会交通費	27,610	今年度は1回開催を予定	
	役員会費	10,000		
	事務局手当	20,000		
	(手当関連 小計)	(57,610)	(45,000)	
	「水かき通信」発送費	4,960	5,000	今年度は2回発行予定
	「水かき通信」印刷費	5,000	2,000	
	圃場見学会案内発送費	2,320	1,600	80円×20通
	その他文書通信費	2,360	1,600	80円×20通
	その他文書印刷費	0	1,000	
	(文書関連 小計)	(14,640)	(10,200)	
	アンケート印刷費	0	2,000	
	アンケート発送費	0	1,800	90円×20通
	アンケート返信費	0	1,600	返信用切手：80円×20通
	(アンケート関連 小計)	(0)	(5,400)	
	総会・圃場見学会補助費	30,000	30,000	
	会費払い込み手数料	0	2,100	30人×70円
	総会運営費	15,000	15,000	総会講師料等
	全国大会参加補助費		60,000	全国合鴨フォーラム参加者への補助
	全国合鴨水稲会 会費		10,000	
	雑費	12,876	3,000	
実支出 計	130,126	181,700		
予備費	0	19,206		
<b>支出の部合計</b>				
	130,126	200,906		
<b>次年度繰越</b>				
	88,906	0		

2. 積立金について

単位：円

	金額	備考
前年度積立金	150,000	
	(100,000)	三島名誉顧問からの寄付金 (2006年2月)
	(50,000)	アイマトン様からの寄付金 (2008年5月)
<b>積立金 計</b>	150,000	

## 第 19 回全国合鴨フォーラム秋田大会に参加して

清水池義治（名寄市立大学）

### 1. はじめに——合鴨農家は鳥インフルエンザ問題をどう捉えるべきか——

2009年2月15日に秋田県湯沢市で第19回全国合鴨フォーラム秋田大会が開催されました。北海道合鴨水稲会からは代表世話人の折坂さん、事務局の村田さん、清水池の3名が参加しました。合鴨水稲会に関わるようになって5年になりますが、全国フォーラムへの参加は初めてです。本稿では、特に印象に残った明峰哲生さん（農業生物学研究室）の報告「鳥インフルエンザと合鴨農法」について報告します。

ここ数年、世界各地で鳥インフルエンザ（特に高病原性の「H5N1」型ウイルス）が問題視されています。日本でも2004年に家禽への感染が確認され、大量の家禽が殺処分されました。2008年春に秋田と北海道で野生の白鳥からウイルスが検出されたのは記憶に新しいところです。鳥インフルエンザウイルスは、単に家禽の大量処分によって畜産農家に大きな経済的損失を与えるだけではありません。このウイルスが「新型インフルエンザ」ウイルスへと変異し、人間間での世界的な大流行＝「パンデミック」を引き起こすことが懸念されています。

合鴨農家にとって鳥インフルエンザは他人事の問題ではありません。「野生の渡り鳥から鳥インフルエンザウイルスを感染させられたら…」。そのように考えて合鴨農法を断念した農家も少なからず存在すると思います。合鴨農家は鳥インフルエンザ問題をどう考えるべきでしょうか。明峰さんの論点は以下の3点です。

### 2. 明峰さんの論点

#### 1) 鳥インフルエンザは人間と共生してきた

鳥インフルエンザは最近になって突然現れたわけではありません。鳥インフルエンザウイルスと人間は長い間ずっと共生してきました。渡り鳥であるマガモ、水生家禽であるアヒルなどは昔から鳥インフルエンザに感染しています。

ただし、感染することと実際に病気を発症すること（＝病原性）とは別です。マガモやアヒルに感染している鳥インフルエンザは病原性をほとんど有していませんでした。考えてみれば、これは当然です。ウイルスは自分が生きていくために動物などの宿主に寄生する（＝感染する）ので、その宿主が病気になって死んでしまっただけではしょうがありません。ウイルスの病原性と、動物のウイルスに対する抵抗性が微妙にバランスを取り合う中で、人間は鳥インフルエンザと付き合ってきたのです（時にはインフルエンザに感染・発症しながら）。

ところがニワトリなど家禽間で感染を続けていくうちに、鳥に強い病原性をもつ鳥インフルエンザウイルスが出現しました。これが問題となります。

#### 2) パンデミック（世界的大流行）は「農的世界」が生むのではなく、「農的世界」の崩壊が生む

明峰さんいわく、「農的世界」とは別々に生きていた生物のネットワーク化であり、ウイルスもその一員としてネットワーク化されるそうです。豚、アヒルといった家畜・家禽と人間が濃密に接触していた中国南部ですら、人間と動植物の密度が一定以下なら問題とはならず、そこでは「病との共存」が成立していました。

しかし、資本主義の進展によって大資本の工業的大規模畜産が主流となってくると状況は変化してきます。大規模畜産では以下の点が今までの畜産と異なります。第1に高密度舎飼といった飼育条件によりニワトリの抵抗性が弱くなります。これによって、ウイルスの病原性とウイルスに対する抵抗性のバランスが崩れます。第2に極端な密飼いにより、自然界ではあり得ないほどのウイルスの相互感染が進行してウイルスが濃縮されます。この結果、ウイルスの突然変異の可能性が増します。第3に密封空間で飼育されることでウイルスの外界への拡散が阻害され、さらにウイルスが濃縮化されます。こういった条件が重なることによって、高病原性

を持つ鳥インフルエンザが出現したのです。生物と人間とのネットワークの崩壊＝「農的世界」の崩壊が、これまでとは異なる鳥インフルエンザを生みました。このように考えるならば、伝統的な畜産方式＝人間と家畜が一緒に生活すること自体が鳥インフルエンザの温床であるかのように報道するのは問題です。彼らはむしろ被害者と言うべきです。

### 3) 「真つ当な農業を真つ当に行うほか」ない

鳥インフルエンザに対して明峰さんは「真つ当な農業」をするしかないと言えます。例えば開放型の自然養鶏は、ニワトリの抵抗性を高め、ウィルスの拡散を促進することでウィルス濃縮を防ぎ、高病原性＝強毒ウィルスの出現を阻止すると指摘します。しかし、それでもなにかの“問題”は起きるとも付け加えました。それをただ拒絶して排除するのではなく、「受け入れる」ということ。それが自然と共に生きるということだ。私が印象に残った言葉です。

### 3. おわりに

工業的大規模畜産によって高病原性を獲得した鳥インフルエンザウィルスは、現在自然界にも流出しているようです。昨年の秋田・北海道

での白鳥の件はそういった事実を物語っています。しかし、そうだとでも合鴨農家が合鴨農法をやめれば、高病原性の鳥インフルエンザウィルスがいなくなるわけでもなければ、「新型インフルエンザ」の発生＝パンデミックを阻止できるわけでもありません。インフルエンザ専門家が口をそろえて言っていることは、パンデミックは近い将来必ず起きる、そして人間はこれを阻止できないということです。「農的世界」を崩壊させて利潤追求した人間への因果応報と言ってしまうのは簡単ですが、自然と人間が共生できる“本来の畜産”の姿を合鴨農法が社会に提示し続けていく意義は大きいと考えます。

他にも興味深い報告がありましたが、今回はこの程度にとどめます(末尾の報告一覧を参照)。報告者と参加者から元気をもらい、とてもよい全国フォーラムとなりました。単に合鴨水稲同時作を営む農家の集まりを超えた“合鴨水稲会”の将来性・方向性を意識できたかなと思います。

追伸 2009年1月から名寄市立大学にて教員として働くことになりました。これに伴い北海道合鴨水稲会事務局を“卒業”しますが、今後は一会員としてお世話になります。これからもよろしくお願いします。



公演する名峰氏

#### ※参考 報告論題一覧

##### 【講演】

- ・21世紀における「食」と「農」のあり方を展望する  
工藤昭彦（東北大学大学院教授）
- ・鳥インフルエンザと合鴨農法  
明峰哲生（農業生物学研究室）
- ・合鴨農法による農家の経済性  
徳野貞雄（熊本大学教授）

##### 【話題提供】

- ・合鴨の放飼時期及び日齢の違いと水稲ヒノヒカリの生育・収量  
草野拓志（福岡県立農業大学校養成科2年）
- ・私の合鴨米 井手教義（粋活き農場代表）
- ・合鴨水稲同時作の問題と対策——合鴨乾田直播を中心として—— 古野隆雄

## 合鴨水稲同時作に関するアンケートの集計結果について

小板橋・庄子（事務局）

2009年1月、総会案内に同封する形で、農家で水稲を作付している会員にアンケート票を送付しました。各自で記入してもらったうえ、同封の返信用封筒に入れて送り返してもらう形式をとりました。アンケート票は22通を発送し、回答は10通でした（回収率46%）。

以下では、アンケートの主な項目について、その結果を報告します。

表1 合鴨水稲同時作の実施状況

単位：ha、%

農家 記号	合鴨水稲同時作実施面積			08年度 水稲作付 面積	08年度 合鴨作付 比率
	2006	2007	2008		
a	2.0	2.0	2.0	8.0	25.0
b		1.5	1.5	11.0	13.6
c				4.7	
d	1.8	1.8	1.8	20.1	8.8
e				0.5	
f	1.0	0.4	1.4	2.4	58.3
g	0.1	0.1		9.5	
h	1.2	1.2	1.2	8.3	14.4
i	1.4	1.4	1.4	1.4	100.0
j	1.1	1.1	1.1	3.9	26.7
合計	8.5	9.4	10.3	69.8	
平均	1.2	1.2	1.5	7.0	

- ・合鴨水稲同時作の実施面積は平均して1ha余りであり、水稲作付面積の1~2割というパターンが多いようです。

表2 合鴨ヒナの導入元

導入元		2008年度実績		2009年度予定	
業者名	所在地	戸数	羽数	戸数	羽数
高橋人口孵化場	(大阪府)	7	845	5	580
原田孵化場	(熊本県)			1	30
日本有機薩摩鴨孵化場	(鹿児島県)	1	250	1	250
合計		8	1,095	7	860

- ・合鴨の雛は、大阪府の高橋人工ふ化場から購入しているという回答がほとんどです。



表3 羽数の推移

農家 記号	購入 時	放飼 開始時	引上 げ時	放飼後 残存率
a	250	200	100	40.0
b	150	130	110	73.3
c	50	45	45	90.0
d	192	185	167	87.0
f	150	142	11	7.3
h	103	101	80	77.7
I	120	110	90	75.0
j	80	78	55	68.8
合計	1,095	991	658	-
平均	136.9	123.9	82.3	64.9

- ・水田に放してから引き揚げるまでに2割程度減りますが、それでも80羽あまりの鴨が残ります。

表4 水田から引き上げた鴨の処理方法

単位：羽、%

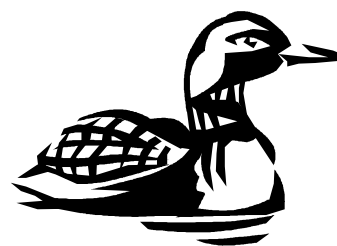
農家 記号	引上げ 羽数	処理方法				贈答先	販売先
		自家消費	無償譲渡	販売	その他		
a	100 (100)	2 (2)		98 (98)		-	個人
b	110 (100)	20 (18)	70 (64)		20 (18)	米の販売先	-
c	45 (100)	45 (100)				-	-
d	142 (100)	2 (1)	8 (6)	111 (78)	21 (15)	ホテル、レス トラン・米小 売店、親戚	中小企業家同 友会、個人、 動物園
f	11 (100)				11 (100)	-	-
h	80 (100)		80 (100)			個人	-
I	90 (100)		90 (100)			そば屋	-
j	55 (100)	20 (36)	35 (64)			個人	-
合計	633 (100)	89 (14)	283 (45)	209 (33)	52 (8)		

注1：()内は引上げ羽数に対する比率である。

注2：dは引上げ数167、後に死亡があり処理場持込数は142となった。

- ・会員によってばらつきはありますが、無償で譲渡している場合が多いようです。販売できているという回答は2会員だけでした。

以上



## 名寄徒然草（5） 名寄の自然と四季

三島 徳三（名寄市立大学）

名寄で4回目の春を迎える。赴任して最初の年は、「何でこんな北辺の地に来たのか。野幌で子供や孫たちに囲まれ、農業をやっていたほうが良かったのでは」と思うこともあった。しかしこの土地に慣れ、大学内外の関係も深まってくると、次第に愛着が深まってくる。単身赴任の気楽さと自由から、北大当時よりも行動範囲が広がってきたことも背景にある。

私は住民票が名寄市にあるれっきとした名寄市民だが、あらためて市民の立場からこの地をみると、良いところがたくさんある。中でも自然と四季の変化が素晴らしい。

名寄を含む道北は、旭川、網走、釧路よりも緯度が高い。そのため3月の春分の日から9月の秋分の日までの半年間、昼間の時間が日本のどこよりも長い。北海道の人間は、春夏秋の温暖期に活動が盛んになるが、この期間に昼の時間が長いことは、得難いアドバンテージである。夏至近くになると4時ころから明るくなる。歳をとってきたので5時ころには目を覚ます。この貴重な朝の時間を利用し、昨年ウオーキングを始めた。約1時間、4kmほどのコースを早足で歩くと、飲酒による前夜のカロリー過多も解消し、体重をコントロールできる。住まいにしているマンションから30分も歩けば名寄川と天塩川の合流地点になり、運が良ければアオサギのコロニーを見ることができる。

名寄にかぎらず北海道の春から初夏の季節は、日本でいちばん美しく自然が彩るのではないかと常々思っている。寒さにじっと耐えてきた蕾がいっせいに開花する。新緑の鮮やかさはまばゆいばかりである。自然が演出する、この素晴らしい季節の変化を鑑賞しないで、家に閉じこもっているようでは人生の大損である。

私も時間があれば車でドライブにでかけ季節を感じ取る。早春にはワラビやコゴミ、フキなど山菜の恩恵に預かることもしばしばだ。

7月1日は、待ちわびた山女（ヤマメ）の解禁の日だ。名寄に来て2年目から溪流釣りを始

めた。ポイントはオホーツク海に流れる小さな河川の上流で、名寄からは車で40分ほどだ。熊よけの鈴を鳴らしながらの釣りはスリル満点で、2時間くらいで数十匹のヤマメ（多くは新子）が釣れる。秋にはサクラマス産卵風景も見ることができる。

春から秋にかけて昼間時間が長い半面、秋分の日から春分の日までのそれは日本でいちばん短い。冬至近くになると午後4時には薄暮になる。加えて名寄の冬の平均気温は札幌よりは5℃くらい低い。山を超えた幌加内町の母子里地区はマイナス42℃という日本の最低気温を記録したところだ。名寄もかつては零下30℃を下回り、室内の酒まで凍る日があったという。しかし地球温暖化のためなのだろうか、近年ではマイナス20℃以下になることは減多にない。今冬も2回だけである。

北海道の中でも北に位置する名寄は、最高気温が零下の真冬日も多い。そのため、雪が解けザラメにならないので、スキー場の雪はいつもサラサラだ。名寄市の中心部から車で10分くらいのところに、「雪質日本一」のピアシリスキー場がある。

名寄に来て1年目の冬から30年ぶりにスキーを始めた。最近のスキーは短くなった分、操作がしやすい。一人で行って骨折でもしたらたいへんなので、いつも若い人と一っしょに行くが、技術は私の方が上だな、と感じつつ毎回リフト10本くらいを滑り下りる。

この冬、初めてスノーモービルにも乗った。ライセンスをもつ運転者の後部に座り、標高986mのピアシリ山の山頂まで登った。指呼の間に展開する雪嶺の感動を残しつつ下山、中腹の山小屋で主催者が用意した名寄名物のジンギスカンとおにぎりをいただいた。

自然と四季の変化、人とのふれあいに一期一会を感じつつ、今年のドラマが始まる。

## 事務局からのお知らせ

### ●今年のおもてなし学会について

今年のおもてなし学会は道央ブロックの担当です。例年通り7月ごろの開催を予定しておりますが、詳細が決まり次第ご連絡いたします。

### ●年会費の早期納入にご協力ください

本会は会員の皆様からの会費によって運営されています。円滑な運営のために、早期の納入をお願いしております。年会費は3,000円です。同封の用紙を利用してお振り込みください。

## 編集後記

新事務局員の小板橋と申します。旧事務局員の清水池さんがめでたく就職されて事務局を卒業するというので、総会開催の3日前、清水池さん直々に役目を仰せつかりました（実は私は旅行好きでして、名寄に行けると聞いた途端に参加を決めたものです）。普段農家の方々とお話しする機会を持たない私にとって、合鴨水稲会は良き勉強の場となることと思います。何分不束者ではありますが、今後ともよろしく願いいたします。（小板橋）

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第28号  
2009年4月24日 発行

(連絡先) 北海道合鴨水稲会 事務局  
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目  
北海道大学大学院農学院  
共生農業資源経済学講座 食料農業市場学分野内

庄子太郎・村田均・佐々木稔基・小板橋正裕  
TEL: 011-706-3858  
FAX: 011-706-2470  
e-mail: shoji-t@agecon.agr.hokudai.ac.jp